筑波大学　先史学･考古学研究　第21号　101-108　2010

調査報告

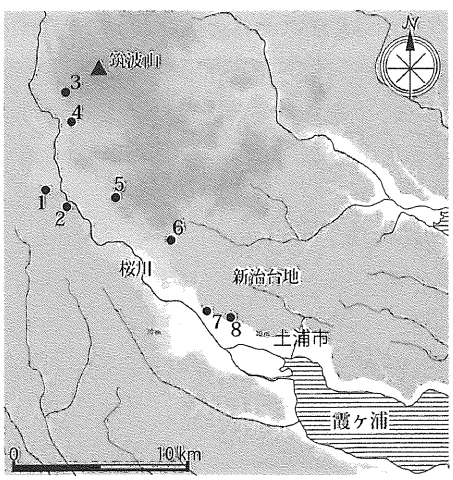
茨城県土浦市所在坂田塙台11号墳の測量調査報告

小野塚　拓造

Ⅰ．はじめに

坂田塙台古墳群は，茨城県土浦市(旧新治村)にある小規模な円墳を主体とする古墳群である。周辺には古墳が数多く残されており，かつては上坂田古墳群･下坂田古墳群と呼ばれていた(茨城県教育庁文化課編2001)。また付近にある武者塚古墳の発掘報告書(増田ほか1986)においては，これらをまとめて，坂田古墳群として報告している。2008年度に，土浦市教育委員会によって古墳群の確認調査が実施され，これらの古墳群の名称と範囲が再検討されることとなった。その結果，坂田立野古墳群，武者塚古墳，坂田塙台古墳群，坂田台山古墳群という4つの古墳･古墳群に再区分され，同市の遺跡台帳に登録された。この土浦市教育委員会の踏査によって，いくつかの新しい古墳も発見されている[1)]。

本稿で報告する坂田塙台11号墳の測量調査は，2008年12月8日から14日にかけて，筑波大学人文学類先史学・考古学コースの考古学実習として実施された。実習担当は常木晃，参加者は長谷川敦章，小野塚拓造，清家大樹(以上，大学院生)，飯塚守人，石川知行，一井悠平，川口有香，杉山絢香，平田達也，米田浩之，太田有里乃，小野奈々子，齊藤希，高柳祐美，堀川綾乃，松島悠史，山田菜摘，雪丸千彩子(以上，学群生)であった。地権者である久家義之氏には測量調査についてご理解をいただいた。また，土浦市教育委員会の諸氏からは貴重なご助言を賜った。特に，塩谷修氏(土浦市立博物館)，石川功氏(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)，比毛君男氏(土浦市教育委員会文化課)からは，周辺地域の古墳や埴輪について，様々なご教授をいただいた。ここに御名前を記すことで感謝の念を表したい。

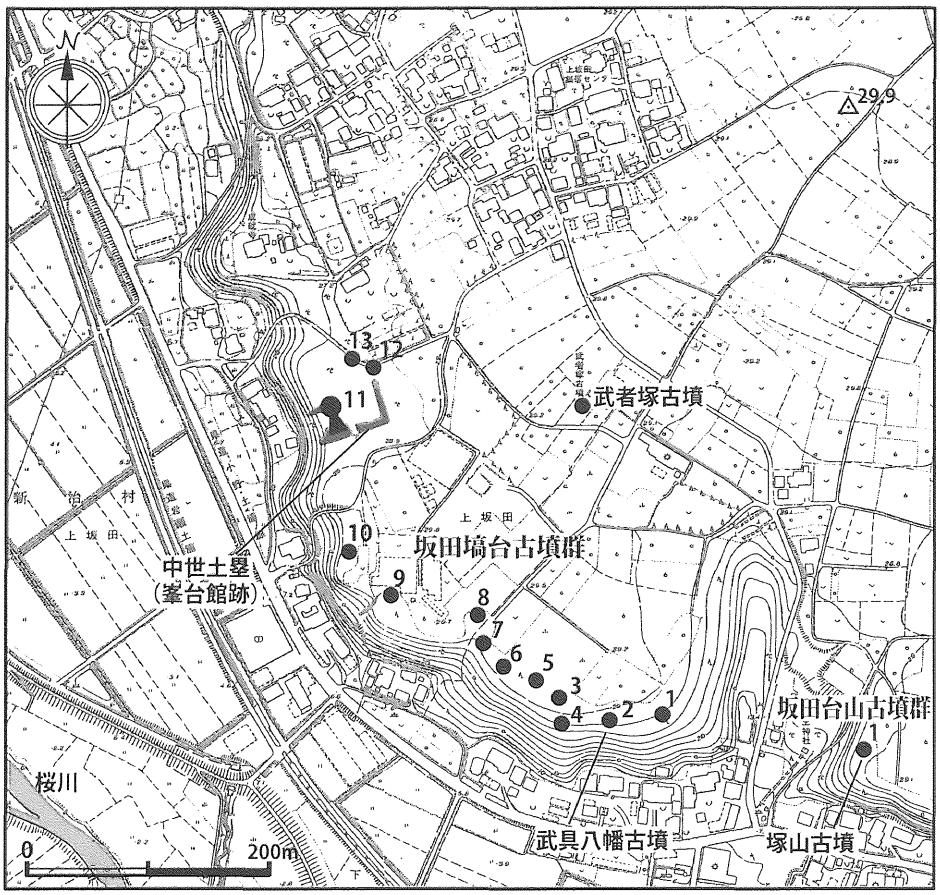


1 桜塚古墳　2 山木古墳（群）　3 土塔山古墳　4 八幡塚古墳
5 甲山古墳　6 高崎山古墳群　7 坂田塙台古墳群　8 石橋古墳群

第1図　桜川周辺図

Ⅱ．坂田塙台古墳群の周辺と調査

坂田塙台古墳群は筑波山麓と霞ヶ浦のほぼ中間，桜川の流域に位置している。桜川は，桜川市に源を発し，筑波山の西側を南へと流れ，霞ヶ浦に注



第2図　坂田塙台古墳群とその周辺
(国土地理院発行2万5千分の1地形図を用いて作成)

ぐおよそ63kmの河川である。流域の地形は桜川の浸食作用によって形成されたもので，狭隘な河川低地と，それを挟むように存在する台地で構成されている。この河川低地と両岸に展開する台地には，20～30mの高低差がある。坂田塙台古墳群は，桜川の左岸に広がる新治台地上に形成された(第1図)。台地の端部から現在の桜川までの距離は300mほどである。台地上には，高崎山古墳群から石橋古墳群に至る古墳群が連なって築造されており，坂田塙台古墳群はその中央に位置する。前方後円墳1基(11号墳)，円墳10基，墳形不明2基からなる古墳群である[2)](第2図)。

桜川流域は『常陸国風土記』に記述されている筑波国の所在地と目されている地域であり，古墳時代に，この地域を治めていた地方首長の墓であったと推定されるいくつかの古墳が知られている。すなわち，4世紀末の前方後方墳とされる桜塚古墳にはじまり，それ以降の前方後円墳である山木古墳，土塔山古墳，八幡塚古墳，甲山古墳と続く古墳であり，4世紀から6世紀前半までの継続した歴代首長の存在が推定されている(岩崎1990)。

坂田塙台古墳群が位置する台地は，これら歴代首長墓とされる古墳が展開した地域からはや

や下流に位置する。谷津を一つ隔てた東側には坂田台山古墳群が形成されている。

坂田塙台古墳群(とその付近の古墳)を構成するのは，規模的には小型の円墳が主体となるが，希少で豪華な副葬品を出土した古墳が存在している点を強調しておくべきである。同2号墳(武具八幡古墳)[3]からは江戸時代末期に甲冑2領と鉄鏃が出土し，地元の旧家に伝えられている。これらは衝角付冑や眉庇付冑を含む特筆すべき出土品で，報告者の滝沢誠氏によって5世紀後半に位置づけられている(増田ほか1986：70頁)。さらに，間近にある武者塚古墳(7世紀末)からは，金銅装三累環頭太刀，銀装圭頭太刀，鉄柄付銅杓など，極めて希少な遺物が出土している(増田ほか1986：70頁)。また下坂田出シ山の耕作地からは，重圏文鏡が出土している。坂田塙台8号墳[4]の裾部からは，円筒埴輪と人物埴輪の頭部が出土したとされ，6世紀前半に位置づけられている(増田ほか1986：12頁)。坂田塙台古墳群から谷津一つを隔てたところにある坂田台山古墳群1号墳(塚山古墳)では，1964年に土浦第二高等学校による発掘調査が行われており，箱式石棺と，直刀や鉄鏃などの副葬品が報告されている。この調査によって同古墳は6世紀中頃と年代づけられている(樋口・山田1967)。

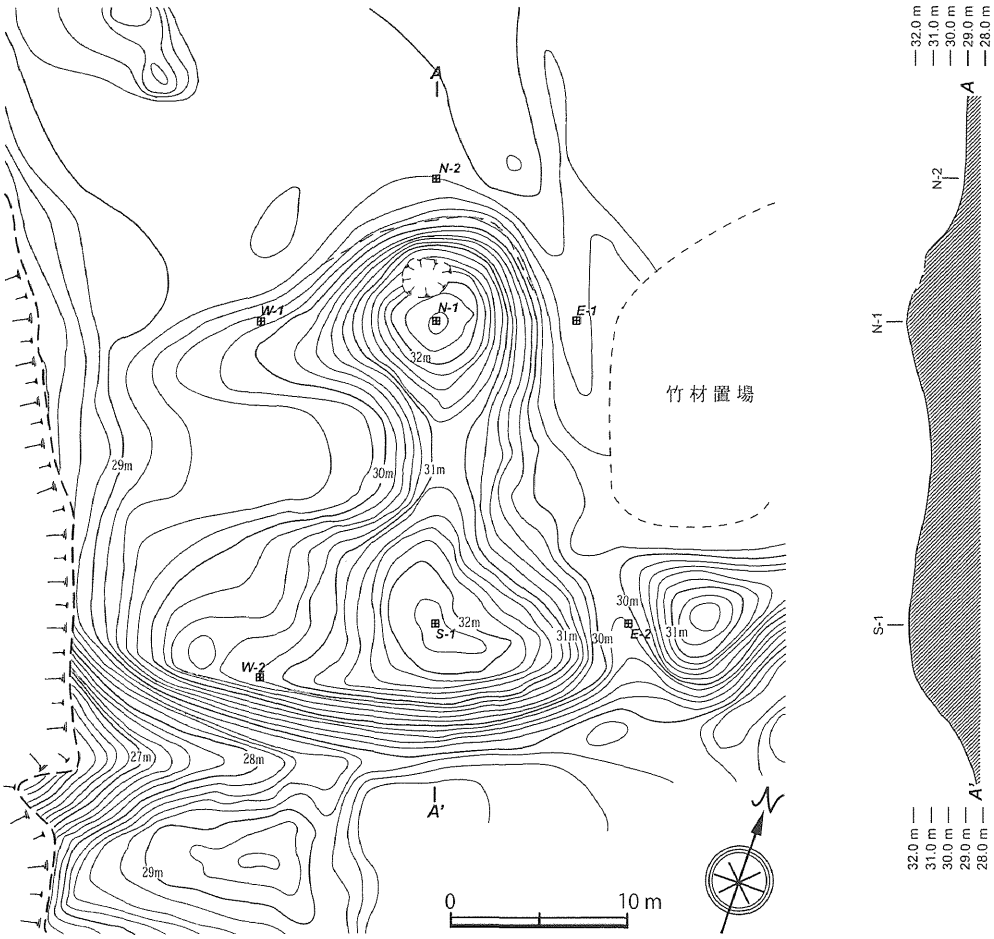
このように先行する調査成果を概観してみると，坂田塙台古墳群(とその付近)では，5世紀代から7世紀にかけて連綿と古墳が築造されていること，そして，規模は小さいながらも有力な古墳が複数含まれていることを確認できる。これらの要素は，古墳時代の常陸国に存在していた，地域首長よりも下位に位置する在地勢力(岩崎1992)でありながら，中央と密接な関係を有していた人々の存在を示唆している可能性があり，同地域の古墳時代社会をより重層的に理解する上で重要である。以上のような視座に立ち，本調査では坂田塙台古墳群に再注目し，同古墳群における最大の古墳と目され，前方後円墳であった可能性が指摘されている(増田ほか1986：10頁) 11号墳を測量することとした。精密な測量図を作成し，墳形と規模，および築造時期を確定することを調査目的とした。

Ⅲ．墳丘について

1．11号墳の現状と峯台館跡

坂田塙台11号墳は，急峻な斜面となっている台地の縁辺部から10mほどの地点に築造された古墳で，その主軸は台地の縁とほぼ平行している。11号墳周辺は現在竹林となっており，墳丘及びその周辺は落ち葉や切り倒された竹に覆われている(第3図)。木々や繁茂する植物に遮られてしまうため，墳頂から河川低地を眺望することはできない。しかし，築造当時は，河川低地から墳丘を見上げることができたと考えられる。武者塚古墳の発掘報告書中に

第3図　現在の墳丘(東南から)



第4図　坂田塙台11号墳墳丘測量図

は，「11号墳は後世の土塁によって原状を損なっているが，前方後円墳であった可能性がある」と記述されている(増田ほか 1986：10頁)。11号墳付近には峯台館と呼ばれる中世の城館跡が現存していることが知られており(茨城県教育庁文化課 2001：169頁)，この土塁は峯台館に属する遺構と捉えることができる。測量調査の際にも，前方部の南側に土塁が現存しているのを確認することができた(第2図)。この土塁は，桜川を眼下に望む台地の縁から東に向かって伸びるもので，前方部の先端に接している。さらに「虎口」とも考えられる部分を挟み，東へ40mほど伸びたところで，北に向かって屈曲している。城館の南端を区画する土塁であったのだろうか。峯台館跡の北側は，道路や耕作地となっており，土塁等の遺構は現存していない。ちなみに，今回の調査では中世に属する遺物は1点も採集されなかった。

2．11号墳の測量結果

基準点の設定は開放トラバース方式で行い，後円部墳頂と思われる高まりの頂上にベンチ

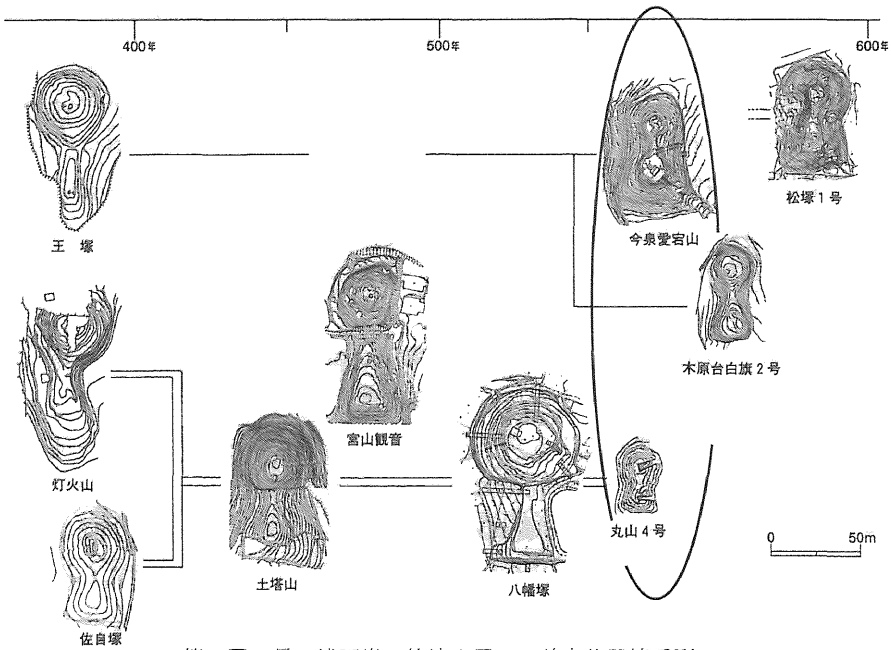
マークN-1を設け，N-1から17mの前方部頂と考えられる地点に基準点S-1を設置した。この2点を通る直線を基準線(X軸)とし，これに直行する直線をY軸として，その他の基準点を設けた。ベンチマークの標高は，武者塚古墳より300mほど北東に位置する標高29.9mの三等三角点(点名：上坂田，コード：TR35440113301，第2図参照)から，トータルステーションを用い求めた。墳丘および周辺地形の測量は，トータルステーションと平板を併用して行った。なお，測量図は50分の1で作成し，等高線の間隔は20cmとした。また，1.2mのボーリングステッキを用いて埋葬施設の確認に努めたが，その位置の特定には至らなかった。なお，葺石は確認されていない。

測量調査の結果，坂田塙台11号墳が前方後円墳であるとする見解を追認することができた(第4図)。主軸はN18° Wである。後円部の西側にはスロープ状の土盛りが設けられており，墳丘が後世に改変されている。このスロープは城館がつくられた際に，墳丘が何らかの形(例えば，櫓の土台など)で利用された痕跡であると考えられる。しかし，後円部の東側は残存状況が比較的良好であり，築造時の後円部の墳形をある程度留めているものと判断できる。後円部からくびれ部に至る形状は，標高29.6～30.0mの等高線に現れていると考えられる。墳丘の現状から後円部の規模を復元すると，直径13mほどであったと考えられる。また，後円部頂と周辺の平坦面の比高差は約3.6mである。

これに対して前方部は，前述したように，中世の遺構と考えられる土塁の中に組み込まれており，特に西側には改変が加えられている。築造時の墳形をかろうじて留めているのは東側であり，測量図からは，くびれ部から前方部にかけての形状が標高30.4～30.8mの等高線に表れていることが推測される。前方部の規模を厳密に求めることはできないが，その長さは後円部の直径と同規模か，それ以上であったと考えられる。測量図を基準にすれば，前方部の長さは約15mであり，11号墳は全長28mほどの前方後円墳であったと考えられる。また前方部幅も後円部に匹敵する規模であったと推測できる。さらに，前方部と後円部の比高差は0.4mほどであり，高さにおいても前方部が後円部に迫っているといえる。

茨城県の前方後円墳の墳形については，前期末葉(4世紀末)の前方後円墳の前方部は後円部径よりも幅が短く，高さも後円部よりも低いが，前方部は次第に大きくなり，後期には幅および高さが後円部に匹敵するようになる，という傾向が指摘されている(滝沢 1994)。さらに，木崎悠氏と茂木雅博氏は霞ケ浦沿岸における前方後円墳の築造規格をより詳細に考察している(木崎・茂木 2000)。この研究の中で，霞ケ浦西岸・筑波山周辺における前方後円墳の築造規格は，(1)前方部が未発達という前期末葉の特徴が中期を経て後期まで継続している点を特徴とし，(2)前方部の幅と高さが後円部に匹敵するようになるのは，後期後半(今泉愛宕山古墳，丸山4号墳)以降であることが指摘されている(第5図)。

坂田塙台11号墳は，前方部の長さと幅が後円部と同規模かそれ以上であり，高さは後円部とほとんど変わらない。このことから，坂田塙台11号墳の築造時期は後期に求められ，少なくとも八幡塚古墳よりも後代に位置づけることができる。おそらく，今泉愛宕山古墳や丸山4号墳とほぼ同時期に築造されたのではないだろうか。次章で述べるように，測量調査中に表採



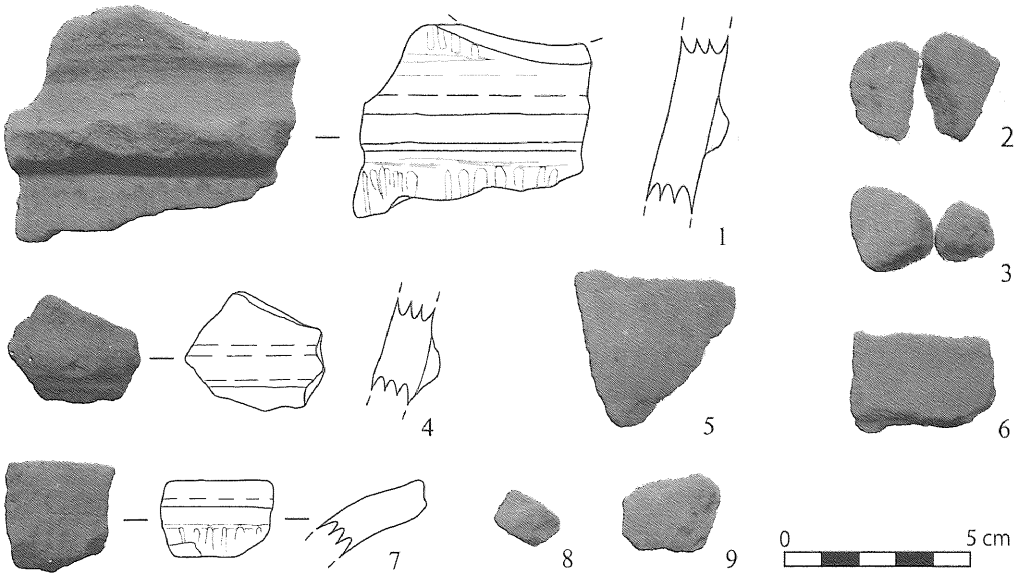
第5図　霞ヶ浦西岸・筑波山周辺の前方後円墳系列
（木崎・茂木編 2000: 第23図に加筆）

された埴輪片はこの年代を支持している。

Ⅳ．採集遺物について

本測量調査では，合計11点の遺物を表採することができた（第6図，第1表）。すべてが埴輪の破片であると考えられ，赤褐色を呈し，胎土に雲母粒が混和されている点で共通している。胎土に雲母を豊富に含む埴輪は，桜川中・上流域から霞ヶ浦南岸地域において特徴的に見られるものである。表採遺物は小片で表面が摩耗しているものも含まれるが，うち6点はタテハケなどの円筒埴輪の属性を残している。第6図：1，4は，タガを含む円筒埴輪の胴部である。第6図:7は円筒埴輪の口縁部と考えられ，外側に大きく開いた形態から，朝顔形の埴輪であった可能性も指摘できる。第6図：1の器面にはタテハケが施され，さらにヨコナデによってタガが成形されている。器面調整はタテハケだけであり，二次調整の痕跡は少なくとも残存する部分には存在しない。このような特徴の円筒埴輪は川西編年のⅤ期に相当し（川西 1978），11号墳が6世紀に築造された古墳であることを示している。

第6図：1のタガは低く太めであり，その断面は丸みを帯びているものの，山形ではなく台形を呈している。現存する部分から透孔を復原すると直径10cm程度となり，比較的大きな円形の透孔が設けられていたことが分かる。周辺地域の円筒埴輪に関する研究（塩谷 1985，木崎・茂木編 2000：117頁，日高 2003）に従えば，こうした特徴は，川西編年のⅤ期の中でも前半から中頃に位置づけられる要素である。また，第6図：1と類似した円筒埴輪（山武考古学研究



第 6 図　採集遺物

第 1 表　採集遺物の観察表

表採遺物		表採位置	肉眼で観察できる混和物	色調	焼成	備考
1	円筒埴輪 胴部	後円部墳頂	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	タガ、透孔、タテハケ
2	埴輪片？	後円部墳頂	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	表面磨耗
3	埴輪片？	後円部墳頂	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	表面磨耗
4	円筒埴輪 胴部	後円部墳頂	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	タガ、タテハケ
5	埴輪片	後円部	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	タテハケ
6	埴輪片	前方部西斜面	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	タテハケ
7	円筒埴輪 口縁部	後円部南西斜面	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや硬質	タテハケ、内側に指ナデ
8	埴輪片？	後円部墳頂	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	表面磨耗
9	埴輪片	くびれ部	白色砂粒、黒色砂粒、雲母粒	赤褐色	やや軟質	タテハケ

所編 2001: 第 40 図 8 など)が出土している高崎山 2 号墳は，鉄鏃等の編年により 6 世紀前半に位置づけられている。これらのことから，表採した埴輪を 6 世紀前半から中頃のものと比定することが可能であり，11 号墳もほぼ同時代に築造されたと考えることができる。

Ⅴ．おわりに

測量調査の結果，坂田塙台 11 号墳は全長 28m ほどの前方後円墳であり，築造時期が 6 世紀前半から中頃であることが確認された。坂田塙台古墳群における最大の古墳であり，現在までに確認されている唯一の前方後円墳である。したがって，11 号墳の被葬者は坂田塙台の諸墳

を築造した長たちの中では，特に有力な存在であったと考えられる。

関東の首長系列の古墳を概観すると，5世紀後半以降にその規模が小さくなり，同時に，円墳や前方後円形小墳が築造され始めることが知られている(岩崎・松尾 1985)。これらの現象は，大和政権が凋落した在来の首長たちを抑え，在地の中・小勢力と政治的関係を深めていったことを示唆しているとされる。坂田塙台古墳群の周辺に目を向けるならば，霞ヶ浦沿岸部に後期の大型古墳が数多く分布していることに注目すべきであろう。墳丘の規模が80mを超す舟塚古墳，三味塚古墳，権現山古墳，富士見塚古墳などに代表される後期の大型古墳は，6世紀の霞ヶ浦周辺を支配した在地豪族がその勢力を飛躍的に拡大させたことを意味する。白石太一郎氏はこの現象について，畿内の政権や有力豪族が，常陸各地やそれ以北の地域と畿内とを結ぶ交通上の要地として霞ヶ浦周辺を重要視するようになり，畿内の勢力と在地豪族の関係が深まった結果であるという解釈を提示している(白石 1991)。このような霞ヶ浦周辺の政治的状況と対応するように，坂田塙台に古墳を築造した小勢力も6世紀代に中央との交流を持ち始め，「規模は小さいながらも有力な古墳」が築造されるようになったのではないだろうか。

註

1)土高津貝塚ふるさと歴史の広場の石川功氏のご教授による。

2)土浦市の埋蔵文化財包蔵地調査カードによる。

3)旧遺跡台帳では下坂田古墳群5号墳，武者塚古墳報告書では5号墳に相当する。

4)旧遺跡台帳では上坂田古墳群3号墳，武者塚古墳報告書では8号墳に相当する。

引用・参考文献

茨城県教育庁文化課 編　2001 『茨城県遺跡地図　地図編・地名表編』茨城県教育委員会.

岩崎卓也　1990 『古墳の時代』教育社.

1992 「関東地方東部の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集　53-77頁.

岩崎卓也・松尾昌彦　1985 「夜刀の神と開発」『えとのす』第28号　98-106頁.

上田宏範　1985 「前方後円墳における築造規格の展開その五　ー型式分類から見た常陸の前方後円墳ー」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾末永先生米寿記念会.

川西宏幸　1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古古學會.

木崎悠・茂木雅博編　2000 『常陸の前方後円墳 (1)』茨城大学人文学部研究報告第3冊.

塩谷　修　1985 「茨城県における埴輪の出現と消滅」『埴輪の変遷　ー普遍性と地域性ー』群馬県考古学座談会・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究所.

白石太一郎　1991 「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　131-159頁.

滝沢　誠　1994 「筑波周辺の古墳時代首長系譜」『歴史人類』第22号　91-112頁　筑波大学歴史・人類学系.

樋口清之・山田実　1967「塚山古墳調査報告」『上代文化』第37号　71-79頁.

日高　慎　2003 「霞ヶ浦周辺の円筒埴輪　ー編年をおこなうための前提作業ー」『埴輪研究会誌』第7号　27-43頁.

増田精一ほか　1986 『武者塚古墳』新治村教育委員会.

山武考古学研究所編　2001 『茨城県新治村 高崎山古墳群西支群 第2号墳・第3号墳』新治村教育委員会.